

様式第 2 (第12条関係)

加入国際学術団体に関する調査票

1 国際学術団体活動状況 (内規第 11 条 活動報告)

団体名	和	アジア社会科学研究協議会連盟
	英	Association of Asian Social Science Research Councils (略称 AASSREC)
	団体 HP (URL)	http://www.aassrec.org/ (日本学術会議が加盟していることの記載 <input checked="" type="checkbox"/> ・無 )
国際学術団体における最近のトピックについて (学術の進歩、当該団体の推進体制の変化、国際機関・政府・社会との関わり方等)		アジア (オセアニアを含む) 主要国の各国代表が 社会科学の領域を横断する <b>country paper</b> を出して議論するスタイルの会議を、隔年に開催している。前回は「持続可能な未来のための安全保障と公平性」という課題を、日本から発展途上国に至るまで、多様な社会を比較しつつ検討した。アジア太平洋地域の社会科学を代表する組織であり、コンパクトな会議において、社会科学各分野を横断する視点からアジアの課題に関わる先進的なテーマを取り上げ論じる、重要な機会となっている。これまでの人脈や各国の努力のおかげで、焦点が定まっているのが強みである。
政策提言や世界の潮流になりそうな研究テーマ・研究方法・研究助成方式等について		2019 年 9 月にハノイで開催された会議では <b>Security and Equality for Sustainable Futures in Asia</b> をテーマに、格差問題、環境、経済成長、国際関係、社会保障などの問題にさまざまな分野の専門家が切り込んで、活発な議論が交わされた。アジアにおける安全保障と公平性の確保について、総合的な検討が求められていることが確認された。会議の終了時にまとめの議論が採択された。
日本人役員によるイニシアティブ事項や日本からの参加によって進展や成果があったものについて		会議を主催する予定の国から 2 年間会長となる人を出し、会議終了後、副会長となる。日本が主催した 2007 年までの 2 年間、日本学術会議の副会長だった戒能通厚先生が会長となられ、その後、タイが主宰した 2009 年まで先生が副会長を務められた。主催国は 10 数カ国の間を 2 年おきで回している。重要な決定は総会またはその前後の会議で決定され、通常業務は事務局長を中心に交信で処理されている。上記以外には役員は存在しないが、日本は、つねに <b>country paper</b> を出すとともに、基調講演を引き受けたり、テーマについての議論をリードしたりする、有力なメンバーである。2019 年総会時のシンポジウムテーマについては日本が提案した案が採用された。会議開催に日本が立候補するのは数年後になると思われる。 <b>country paper</b> の数は 10 数本に限られるので、各国の代表や <b>plenary speakers</b> が報告するコアの会議の規模は通常数十人から 100 人規模である。
加入していることによる日本学術会議、学会、日本国民への変化やメリットについて		各隔年大会の統一テーマについて、公開シンポジウムを日本学術会議で開催し、オープンな議論を行ってきた。各隔年大会における日本および他の諸国からの報告については「学術の動向」に特集として掲載し、広く公開してきた。2017 年の北

## 様式第 2 (第12条関係)

	<p>京大会における共通テーマの成果は 2017 年 7 月の学術フォーラムで公開し、それを『学術の動向』(2018 年 2 月、特集 2 「アジアの経済発展と立地・環境」)に掲載した。2019 年大会の成果は 2020 年 3 月に公開シンポジウムにより共有が予定されている(新型コロナウイルスに関わる安全配慮のため延期)。AASSREC で扱うテーマそのものが政策に深く関連しているため、アジア各国の実情比較は日本国内での政策課題の検討にとっても大変参考になる。</p> <p>AASSREC は社会科学全般に関わるため、日本学術会議第一部に關係する複数の分野別委員会とも横断的に連携する貴重な機会を提供している。これにより、学術会議自体の活動を活性化することにもつながってきている。社会科学関連の学会の代表者が AASSREC の活動に参加するので、それぞれの学会に学際的な影響を及ぼすことにも大いに貢献している。また、AASSREC の会議では日本の動向自体がアジアの他国にとって関心の対象となっており、変化するアジアにおける日本の存在を示す機会ともなっている。このことは、日本にとって、極めて重要な意味を持つと考えられる。</p>
<p>その他(若手研究者・女性研究者育成法、科学者の倫理に関する当該国際学術団体の基本方針や憲章、資金提供ソースの発掘における画期的な方策等の特記事項など)</p>	<p>AASSREC に参加している海外の代表団には、若手研究者や女性研究者も多数参加しており、発表者として指名されて出てくる場合もしばしばある。AASSREC では従来から十分にそのような学者達が活躍してきている(アジアは近隣なので、子育て中の女性も含め、国際会議に参加することが比較的容易である)。正式の代表参加の人数は限られているが、日本の場合には、準備過程や成果共有の過程で毎回 4 名程度の分野横断的な研究者を招き、テーマについての報告をしていただき、それらを総括する会を開催している。この際、若手研究者、女性研究者の参加にとくに配慮している。</p>

## 2 今後の予定について(内規第 11 条 活動報告)

<p>総会、理事会の日本開催の予定について(招致等の予定も含め)</p>	<p>会議の開催は順番に行われており、日本では 2007 年に開催された。2019 年でその後の 6 カ国目が終了したところであるため、現段階では招致のタイミングとなっていない。ただし、情勢により緊急対応の可能性もあり、また比較的近い時期に機が熟してくるので、積極的に状況を把握しながら、引き続き開催を念頭に準備を進めていきたい。</p>
<p>日本人の役員立候補等の予定について</p>	<p>役員は立候補でなく、総会開催とセットになっており、次回開催国が会長、前回開催国が副会長を出す。このため、現時点では立候補のタイミングとなっていない。2019 年 9 月の総会(ベトナム・ハノイ)で、新しい役員体制が決まり、2 年間継続の予定である。会議に際して行われる総会は、各国代表で構成されており、日本は常時参加している。</p>
<p>現在、検討中の日本からの提言や推進するプロジェクト</p>	<p>2019 年総会時のシンポジウム課題について日本からもテーマ案として、「Gender equality for sustainable development」</p>

様式第 2 (第12条関係)

等の動きについて	と「Security and Equality for Sustainable Futures」を提出し、後者が採択された。事務局長から、その他の重要事項について、相談を受けることもある。
----------	--

3 国際学術団体会議開催状況 (内規第 11 条 活動報告)

総会・理事会・各種委員会等の状況 (過去 5 年間及び今後予定されているもの)	総会開催状況	2021 年 (開催地: オーストラリア、キャンベラ (予定)) 2019 年 (開催地: ベトナム、ハノイ) 2017 年 (開催地: 北京、中国) 2015 年 (開催地: 台北、台湾)			
	理事会・役員会等開催状況	2021 年 (開催地: オーストラリア、キャンベラ (予定)) 2019 年 (開催地: ベトナム、ハノイ) 2017 年 (開催地: 北京、中国) 2015 年 (開催地: 台北、台湾)			
	各種委員会開催状況	年 (開催地: )、	年 (開催地: )、	年 (開催地: )、	年 (開催地: )、
	研究集会・会議等開催状況	年 (開催地: )、	年 (開催地: )、	年 (開催地: )、	年 (開催地: )、
上記会議等への日本人の参加・出席状況及び予定		2019 年第 23 回 AASSREC 会議 (ハノイ)、2 人 (うち代表派遣: 町村敬志、中野聡) 2017 年第 22 回 AASSREC 会議 (北京)、2 人 (うち代表派遣: 杉原薫、中野聡) 2015 年第 21 回 AASSREC 会議 (台北)、4 人 (うち代表派遣: 杉原薫、青木玲子)			
国際学術団体における日本人の役員等への就任状況 (過去 5 年)		役職名	役職就任期間	氏名	会員、連携会員の別
			～		( 期) 会員・連携
			～		( 期) 会員・連携
			～		( 期) 会員・連携
			～		( 期) 会員・連携
			～		( 期) 会員・連携
			～		( 期) 会員・連携
出版物		1 定期的 (年 回) 主な出版物名 2 不定期 ( ) 主な出版物名 主な出版物名 Aging in Asia-Pacific: Balancing the State and the Family, edited by Amaryllis T. Torres and Laura L. Samson, Diliman, Quezon City, Philippines: Philippine Social Science Council. 第 20 回 AASSREC 会議の成果 その後はインターネット上で随時公表。			
活動状況が分かる年次報告等があれば添付又は URL を記載 ( <a href="http://www.aassrec.org/conferences">http://www.aassrec.org/conferences</a> )					

様式第2 (第12条関係)

4 国際学術団体に関する基礎的事項 (内規第3条、4条、5条)

国内委員会 (内規4条第3号)	委員会名	第一部国際協力分科会
	委員長名	町村敬志
	当期の活動状況	<p>(開催日時 主な審議事項等)</p> <p>2018年1月15日 第1回、役員選出、ISSCとICSUの統合について、WSSF福岡の準備状況について</p> <p>2018年4月6日 第2回、ISSCのISCへの統合等について</p> <p>2018年8月7日 第3回、ISC設立総会および今後の対応について、WSSF福岡開催について、AASSRECへの対応について</p> <p>2018年12月20日 第4回、WSSF開催時の分科会メンバー会合実施(9月26日)報告、AASSRECおよびIFSSOへの代表派遣および調査票回答について</p> <p>2019年12月25日 第5回、公開シンポジウムの準備について</p> <p>2020年3月8日 第6回、新型コロナウイルス感染症対策のため中止</p> <p>2020年9月11日 第7回、公開シンポジウムおよび25期への申し送り等について</p>
内規第3 (国際学術団体の要件関係)	<p>国際学術交流を目的とする非政府かつ非営利的団体である</p> <p><input checked="" type="checkbox"/> 1. 該当する                      2. 該当しない</p> <p>※根拠となる定款・規程等の添付又はURLを記載 (<a href="http://www.aassrec.org/about/constitution">http://www.aassrec.org/about/constitution</a>)</p>	
	<p>各国の公的学術機関及び学術研究団体等が国際学術団体に国を代表する資格を有して加入するものが、主たる構成員となっている(主たる構成員が、いわゆる「国家会員」であるか否か)</p> <p><input checked="" type="checkbox"/> 1. 該当する                      2. 該当しない</p> <p>※根拠となる資料の添付又はURLを記載 (<a href="http://www.aassrec.org/about/constitution">http://www.aassrec.org/about/constitution</a>)</p>	
	<p>下記の事項(ア～エ)のいずれか一つに該当するか(該当するものに○印)</p> <p>ア 個々の学術の専門分野における統一かつ世界的な組織を有するもの</p> <p>イ 研究の領域が複数の専門分野にわたるものであって、統一かつ世界的な組織を有するもの</p> <p>ウ 研究の領域が複数の専門分野にわたるものであって、ア又はイの国際学術団体を連合した世界的組織を有するもの</p> <p><input checked="" type="checkbox"/> エ 構成員のうち、各国代表会員がアジア地域等我が国が関係する地域等に限られるものであって、当該国際学術団体の研究の領域が複数の専門分野にわたるもの</p>	
	<p>10カ国を超える各国代表会員が加入している</p> <p><input checked="" type="checkbox"/> 1. 該当する                      2. 該当しない</p>	
	加入国数及び	(14ヶ国・1地域)

## 様式第2 (第12条関係)

主要な各国代表会 表会員を 10 記載	・ 各国代表会員名／国名 Science Council of Japan (SCJ)／日本、 Chinese Academy of Social Sciences (CASS)／中国、 The Korean Social Science Research Council (KOSSREC)／韓国、 Academy of the Social Sciences in Australia (ASSA)／オーストラリア、 Royal Society Te Aparangi／ニュージーランド、 National Research Council of Thailand (NRCT)／タイ、 Vietnam Academy of Social Sciences (VASS)／ベトナム、 Philippine Social Science Council (PSSC)／フィリピン、 Indonesian Institute of Sciences (LIPI)／インドネシア、 Iranian Sociological Association (ISA)／イラン
---------------------------	---